慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	勞働運動史研究會編『新紀元』
Sub Title	The labour history research association (ed.) : The shinkigen
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1961
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.34, No.9 (1961. 9) ,p.83- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19610915-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

さて、著者が本書においてしめされる見解の特色は如何なるものか。まず、行政の概念が從來のそれとことなる。一般に、行政は權力分立との關係で、これを理解する、換言すれば、立法・司法・行政の各々の對立關係において、これを理解すべしといわれている。これにたいし、著者は、從來のごとき權力分立を否定されるようである。

このような行政概念の差異にともない、行政行爲についても、從來のそれとことなる見解をしめされる。行政行爲とは、著者によると、統治行爲、準立法行爲、準司法行爲、執行行爲であり、その内、準立法、準司法の兩行爲がとくに行政法研究の中心となるようである。そして、準司法行爲において、法定手續要件なる概念を重視する。これは、英國でいうナチュラル・ジャスティス、あるいは、米國のフェア・プレイの原則に該當する。

要するに、著者の見解は、わが國法制のごとく、大陸的と英米的法制の混合する狀態において、そのすべてがただちに妥當するとはいいえない。しかし、著者の見解は、行政法研究のため、諸種の新しい問題を提供するとともに、從來の考え方を反省するうえにも非常な參考となる。異色的な興味ある書とし、多くの人々の御一讀をおすすめするとともに、日頃親しき御教授に甘え、暴言をあえて書きつらねたことを、著者におわびして筆をおく。（有信堂發行　六二〇圓）

（金子芳雄）

勞働運動史研究會編『新紀元』

一　明治期の社會運動・思想に關する研究は戰後急速なたかまりをみせてきたが、社會主義團體の發行した機關紙の原典はほとんど一般には手に入らないという狀態であつた。こうしたときに服部之總・小西四郎監修による『週刊平民新聞』（全四册）の復刻をみたのは（昭和二八年一二月から昭和三三年三月）研究者にとつては一條の光明であつた。その後ひきつづき社會主義史料の復刻刊行が期待されていたが、この計畫は『週刊平民新聞』の刊行だけでおわつてしまつた。昨年、勞働運動史研究會が「明治社會主義史料」として明治後期におけるわが國社會主義運動の機關紙のうち、もつとも重要なもの一〇點をえらんで逐次復刻刊行するという計畫を發表した。昨年一〇月その第一集として週刊新聞『直言』をだし、一二月には第二集『光』を刊行し、本年に入りここに紹介する『新紀元』を第三集として三月末に世に送るにいたつた。服部・小西監修による『週刊平民新聞』と勞働運動史研究會編による社會主義史料のち

がいは、後者が寫眞による完全なる復刻であるのにたいし、前者は廣告および新刊圖書紹介で批評のないものだけをのぞき採錄したというものである。したがつて後者は一字一句にいたるまで原典と照合しつつ校正しなくてはならぬという勞苦なしには刊行できないのにもかかわらず、原典の體裁およびそこからくる雰圍氣をほとんどつたえることができない。さらにまた廣告といえども研究者にとつてはきわめて重要な資料となりうるものが多數あるわけであるが、それがまつたく採錄されておらないという缺點もあつた。しかし今回の寫眞復刻はこれらの缺點を完全になくし、復刻としてまず最上の効果をあげている。

二　『新紀元』はキリスト教社會主義者の機關誌として明治三八年一一月一〇日にその第一號が發行された。これより先、同年一〇月九日には社會主義者統一の機關であつた平民社が解散されていた。平民社解散の理由は財政上の困難當局の彈壓および平民社同人間の思想的・性格的・感情的對立にあつた。しかし「一平民社の解散は更に數平民社を生み、一直言の停刊更に數直言を生むこと、恰も一團の猛火碎けて數團數十團の飛火となるが如く」（幸德秋水「予の感懷」、『光』創刊號）で、平民社解散後ただちに『新紀元』『光』『火鞭』『野の聲』等の新聞雜誌がいつせいに誕生した。

『新紀元』はキリスト教社會主義を信奉する木下尙江、石川三四郎、安部磯雄が中心になつて發行され、『新紀元』より一〇日おくれて發行された唯物論派社會主義者の機關紙『光』と併存し、運動を二分する觀をあたえた。わが國社會主義運動における左右の分裂の源流はここにはじまる。明治三四年に、わが國ではじめての近代的社會主義政黨である社會民主黨が結黨されようとしたが、そのときの創始者六人のうち五人まではキリスト教徒であつた。かように日本の社會主義運動にはキリスト教の影響が無視しえぬ大きな要素になつていたが、『新紀元』が刊行されたころの社會主義運動内のキリスト教の影響力は急速に凋落しつつあつた。『光』が幸德秋水、堺利彥、西川光次郎、山口義三、白柳秀湖、赤羽巖穴、大石祿亭、大杉榮、田添鐵二、片山潛、荒畑寒村という筆者をそろえているのにたいし、『新紀元』は安部、木下、石川の三人だけによつて主要論文は執筆されており、社會主義運動の中堅クラスは一人もここには參加しておらなかつた。もつとも山口、田添、赤羽らは兩方に筆をとつていたが、『新紀元』は運動を二分する、その一方の機關雜誌という感じよりはむしろ木下、安部、石川だけのものという感をあたえる。このことは、『光』は平民社以來の地方讀者會、研究會を傘下におさめているのにたいして、『新紀元』には手足となる支部組織がほとんどなかつたことと共に一層その感を深くする。

三　『新紀元』創刊號の冒頭は「神よ、今筆を執りて又た爾の榮

光に跪く、希くは我心を開きて爾の愛と力とに滿つることを得せしめ給へ」なる言葉ではじまる「卷頭の祈」で飾られている。その言葉は敬虔であり、その響きは壯重であるが、これは教會の「說教」ではあつても、大衆によびかける社會主義者のものではない。まさしく『新紀元』は說教の一面もあつた。第二號の卷頭には「父なる神の愛に依て吾人々類は始めて兄弟姉妹たることの歡喜を意識す、神の愛の實現、嗚呼是れ吾人が努力の理想、社會の生命に非ずや」という文字ではじまる「『新紀元』說教の開始」がのつている。この卷頭言は、さらにつづいて「故に傳道の事業は人生の最大苦闘なり、先づ自ら省みて心中の一塊我利の物慾と闘はざるべからず、國家社會制度法律宗教道德風俗習慣等の名目に依て人生の奧義を杜塞する外來の壓迫と闘はざるべからず、是れ我等無識無力の徒の得て當るべからざる聖業なりと雖も、而かも眼前の罪惡を如何にせん」となる。すなわち利己的な欲望を克服し、さらに國家社會制度法律宗教道德風俗等の外來の壓力とたたかうことによつて目的とする新しい社會を建設せんとするものであつた。『光』派およびそれ以前の平民社時代の社會主義者は文物制度による外來の壓力への抵抗とそれの排除には絕大な力をそそいでいたが、新紀元派はさらに「我利の物慾」を克服しなくては眞の理想社會、神の王國は建設できないと强調するのであつた。

新紀元派は、勞働者の利慾を挑撥し、ことさらに階級憎惡の感情をたかめる唯物論派の階級闘爭理論に反對した（石川三四郎「階級戰爭論」第七號）。暴力革命にはもちろん反對する。ところでこうした新紀元派の主張は綜合するとどういうことになるか、というと、この點については「新紀元チラシ」（第一〇號）がつぎのごとく要約している。

社會主義は物質的基督教也

○世界の人類は天地の主なる獨一の神の子であります。故に總ての人は皆な同朋であります。

○此の世は卽ち兄弟が相集まれる一家庭にて、私共は、相互に相愛し、相助けて行かねばなりません。

○既に世界の人類が兄弟なる以上は、其間に、貴賤の階級や、貧富の差等は全然無い譯であります。

○所が、古から英雄といふ野心家が起り、或は虛榮を子孫に傳へんが爲に或は驕奢を後代に續けんが爲に、貴族の階級を起し、財產の獨占を初めました。

○是は、甚だ人の本性の發達、自由の活動を損ふ者なれば之を取除くことに努め樣と言のが卽ち社會主義の原理であります。

○天地を主宰し給ふ吾等が父なる獨一の神は、實に其原理を吾等に示し給ふのであります。

○あゝ、天に在ます我等の父よ、御旨の天に成るごとく地にも成せ給へ。

基督教は精神的社會主義也。

このチラシからうかがえることは、第一に新紀元派の主張はあまりにも「說教」臭いということである。社會運動には宗教運動にも共通する要素はあるが、しかしこの二つは嚴然と區別されるべきものである。第二に、新紀元派は說教臭くはあるが、やはり社會主義を宣傳し、根本的に社會を改造せんとするものであつた。かくて新紀元派はまさに二兎を追うものであつた。

わが國の社會主義運動はキリスト教の影響をうけてスタートしたことはのべた。しかし數年ならずしてキリスト教徒・教會が國策の前に無條件降伏していく樣をみてきたキリスト教社會主義者は、キリスト教からはなれ、唯物論派の社會主義者へと方向をかえていつた。こうした狀況のなかで、またキリスト教の傳統の淺いわが國において、この『新紀元』の主張は時と處とを得ていなかつたといえる。

四　明治三九年夏、母の死にあつた木下は思想的動搖をきたし、『新紀元』一三號の「慚謝の辭」において「新紀元は一個の僞善者なりき、彼は同時に二人の主君に奉事せんことを欲したる二心の佞臣なりき」と書いて、自らこれを葬つてしまつた。『新紀元』は丸一年の生命をここにとじたのである。明治三九年一一月一〇日のことである。

われわれはこの『新紀元』を通じて、キリスト教社會主義者の思想と行動をさぐれるのはもちろんであるが、さらに石川と堺の論爭その他をとおして唯物論派社會主義者の思想と行動の一側面をも知りうる。また當時の政治・文化・社會一般についても新鮮な資料を提供してくれるものである。『新紀元』復刻は、すでに復刻された數種の關係文書とともに貴重な仕事であるといわねばならぬ。（明治文獻資料刊行會　二、八〇〇圓）

（中村勝範）